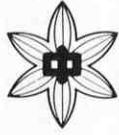


くまざさ



湖陵ヶ丘にたちて

釧路湖陵同窓会長

長 内 宏



市長を先頭に改築促進期成会が毎年
の如く道各関係機関に働きかけ
を行って来た所であり、詳細は略
するが、残念ながら未だ最低決定
を得るに到って居ない。併しなが
ら昨年度に於いては道教委及び道
総務部からの現地視察あり、又最
新の某通信教育版の伝える所によ
れば、道教委見解として「これま
でに構造調査を終えたものについ
ては改築調査を行い、必要なもの
については改築設計を行うことに
なる」としてこの中に湖陵の名も
含まれて居り、その日の極めて近
からん事を信じて疑わない。

母校の現況については別項に述
べられるので重複をさけるが、昨
年、町田校長が着任されて以来、
「温古知新」の精神を基本に、具
体的目標をかかげて学校運営に当
られて居る事は、くまざさ十四号
に見られる如くであり、以来町田
先生の熱血と覇気が校内に横溢
し、母校全体が更に高きを目指し
て飛翔しつゝある事を強く感じた
次第である。

弥生三月は卒業のシーズンでも
ある。今年度、母校では第三十九
回卒業式を迎えるが（更に釧中時
代は三十三回を数える）、又四百
余名の若々しい仲間の息吹きを注
入出来る事は、本同窓会にとつて
も誠に喜ばしい事である。三十九
期卒業生諸君！誠におめでとう。
心よりお祝い申し上げます。

新学期が始まれば、同窓会も又
新年度の行事が始動する。各地で
湖陵同窓生が活躍されて居る事は
御案内の如くであるが、今年度か
ら札幌「熊笹会」が札幌湖陵会と
して拡大再発足する事になり、そ
の発足總會に御招待を戴いて居る。
同会の御発展を心から御祈念申
し上げる。―詳細は次号に―

釧中開校以来七十四星霜、道東
に冠たる湖陵もその間幾多の変遷
を経て今日に到って居るが、特に
近來の社会情勢激動の中で、いわ
ゆる進学校としてのみならず、伝
統を重じ創造にとむ文武両道相俟
つ地域高校の亀鑑として更なる發
展躍進を念願するものである。

同窓会は何と言つても理屈ぬき
に童心にかえり、恩師を交えた湖
陵健児の大団団結の輪でなければ
ならない。同窓会活動には尚種々
の隘路、問題点を残すとは言え、
そこからこそ生成創造のエネルギー
が湧出し来るものと信ずる。
すべからく真紅の旗の下に参じ
ようではないか！
本年も宜しくお願い申し上げます
次第である。

その意味に於いても、今や陋屋
と化したるも同然の母校々舎をみ
るにつけ、その移転改築の一日も
早からん事を切望してやまない所
である。これに関しては夙に鰐淵

標の建築費用を捻出する事、等々
従来幾度に亘り基本的構想を発表
して来た所であるが、更に同窓生
諸氏の充分なる御理解が得られる
建設プランを具体化すべく目下鋭
意研究中である。諸氏の忌弾なき
御意見を賜りたくお願い申し上げ
る次第である。

役員名簿

顧問	問 八	丹 葉	節 郎
〃	〃 三	米 内	富 久 司
〃	〃 三	古 谷	武 一
〃	〃 六	坂 下	忠 勝
〃	〃 七	米 沢	悟 空 翁
〃	〃 七	中 村	隆
〃	〃 三	組 村	真 平
相談役	〃 三	田 村	佳 男
〃	〃 二	長 内	宏
会長	〃 三	割 方	道 子
〃	〃 五	豊 島	弘 道
〃	〃 六	本 間	秀 一
〃	〃 七	久 本	甫
〃	〃 七	原 藤	轟 戸
幹事長	〃 四	遠 藤	隆 吉
〃	〃 〇	関 口	政 司
〃	〃 三	沢 田	征 矢
副幹事長	〃 八	山 本	寿 福
〃	〃 三	坂 上	洋 二
会計長	〃 五	徳 田	瑛 子
〃	〃 八	神 峯	崑 躬
会計監査	〃 〃	〃	〃

学園だより'86

同窓生のみなさまいかがお過ごしですか。

時の移るのは早いもので、この三月十日には第39回卒業式(旧制中学から通算67回)を迎え、さらに八月には創立七十五周年の歴史を刻みます(大正元年八月設立認可、この間の卒業生一八、三四九名)。

昭和二十八年二月焼失した旧校舎にかわって建築された現校舎は、三十年余の風雪に耐えながらも老朽化が激しく改築の声があがって久しいのですが、この程移転改築されるであろう校舎の敷地が緑ヶ岡に確保され、あとは道教委の決定を待つばかりとなっています。

これまで改築期成会を初め、市長、教育長、学校長さらにPTA、後援会、同窓会など関係者の



「湖陵文庫」創設

一方就職状況については、さらに深刻化している雇用不安が反映して、希望者が他校に比べて少ないという有利な条件にも拘らず未定者がかかえているのが現状です。道内のいわゆる進学校と称されている高校の中で、本校

度重なる陳情活動を相俟って、道教委の好意的な動きに照らし判断すると、受ける感触は極めて良好で改築の気運がいつそう高まってきていると言えそうです。

さて今春母校を巣立つ卒業生四三六名の進路希望は別表の通りですが、新しい受験制度のもとで、国公立大の複数校受験が可能になった一方、どの大学も高倍率化した。他方私立の難化に増々拍車がかゝる状況の中で受験生は勿論、父母・教師ともいちように不安をつのらせています。過日催されたP、後、同各関係者と学校側との懇話会の席上、いっそうの学習指導強化が要請されたのも、一つにはその辺の事情を物語っているものと思われま



の部活動は可成り活発な部類に入りますが、文武両道を教育方針の底流に掲げる本校にとっては嬉ばしい限りで、この一年の活躍ぶりを振り返ってみます。

高体(野)連、高文連、国体をはじめ全道規模の各種大会に参加した部の数は二十九、このうち全大会には陸上、ハンドボール、アイスホッケー、放送、美術、個人ではフィギュアスケートで野沢絵里子(二年)、囲碁で松沢仁宏(一年)の両君。

特に陸上では平川敦子さん(二年)が国体少年女子A八〇〇Mで十四年ぶりに全道高校記録を更新(二分十二秒八、四〇〇Mも更新、優れた素材ということ。今後飛躍に期待と関心をよんでいます。ハンドボール(男子)は六年連続七度目(三月、名古屋市)、美術では山下祥子さん(三年)が大阪での全国高校美術展に全道を代表して出品。

陸上で道の記録を

更新した平川さん

くまざき 14号です。紹介されている通り、本年度から新しいころみとして、本校図書館部を中心に同窓生や旧職員など本校ゆかりの方々の著作を収集すべく「湖陵文庫」が創設されました。活動を始めて短期間にも拘らず、

二月現在四十八名の著者から五十一冊の作品が寄せられ、加えて同窓会からはこれらの貴重な作品を収納するための立派な書棚が寄贈されました。何せ息の長い活動です。今後とも同窓生諸氏のご理解とご協力を賜りたいと思います。(なお併せて美術関係の作品収集も考えております) 最後になりましたが、六十一年四月から本校教頭として勤務されていまして永島小舟先生がご病氣のため六十一年八月現職のまゝ逝去されました。後任として河合一也教頭(前津別高校教頭)が十月から勤務されています。 本日に早いこの一年でした。同



全国高校美術展 道代表の山下さん

◎進学志望者の受験校(延べ数)()内は昨年

	男子	女子	計
国公立大	293(141)	63(47)	356(188)
私立大	163(233)	59(79)	222(312)
国公立短大	3(6)	19(19)	22(25)
私立短大	0(0)	147(64)	147(64)
各種・専門校	15(15)	48(28)	63(43)
合計	474(395)	336(237)	810(632)

1人当り受験校(平均2.0校)

◎卒業生の動向

	男子	女子	計
進学志望	245	156	401(92%)
就職志望	17	18	35(8%)
自 営	0	0	0
合計	262	174	436

窓生のみなさんには新年度も健康第一にいつそう活躍されんことをお祈りしながら母校からの報告といたします。

(文責 湖四期 和田信幸)



わが青春は…

そしてその後

釧中二十九期 寺西章夫

29期と云えば、五年卒業の時代に四年で卒業した、謂ば最初に最後の幻の期であることを先ず以って述べなければならぬ。

顧みると我々の時代は入学した

年の十二月に太平洋戦争突入という多難の年であった。しかしそうであつても今は懐旧の情しきりである。「友の喜びに吾は舞い、友の悲しみに吾は哭く。嗚呼、紅の血は燃ゆる」これが我々同期の友情の想いであつた。標茶の軍馬補充部での作業、帯広の飛行場建設（この時札幌一中と渡り合つた）、援農、太平洋炭砒の貯炭場作りなどで最終学年は勉強も碌に出来なかつた。敵性語ということ

で英語の時間は少くなつた。先生方も出征される方が多く、新しい先生方が着任された時代でもあつた。今、思うと赤面の至りだが、新任の先生の実力を問うと、問題をぶつけた者もいた。漢文の時間では「力」があつた者は素晴らし

にはのんびりムードが見られたとは言ふものの、優秀な先輩は敬愛し、憧れたものであつた。先輩は教師よりも恐い存在であつた。特に応援歌の練習時は尚更であつた。残念ながら29期はこの恐しさを発揮することが出来なかつた。その中であつても不思議なことに先輩、後輩の連帯感が存在していたのは否めない。我々仲間には軍閥係の分野に進んだ者も多かつた。

このような下で過ごした29期生は今も尚、結束が非常に固い。毎年同期会を開いているが、六十年には卒業四十周年記念同期会、物故者慰霊祭に七〇名が集い、アルパムを作成して、皆が肩の荷を下ろした。つい先日は厳島神社で厄祓いを行ない、その後敷島商会で福司の生酒の盃を汲み交わし、同期生の健康と益々の活躍を祈念したのであつた。まことに「我が青春は近きに在り」との感を深くする昨今である。

わが青春は…



わが青春は

四十半ばにして惑う

湖陵十二期 渡部清紀

先頃、暫くぶりで湖陵ヶ丘に立つ機会があつて、周囲をゆつくりと見渡してみた。僕らが湖陵に学んだ昭和三十二年から三十五年までの期間を世間では高度成長期の始まりと称していた。

それとは裏腹に僕らが目にしたのは、かなりイカレタ（ゴメンなさい）校舎であつた。これは今でも変わっていない（緑ヶ岡への移転が決まっている）。僕らが学んだ当時の先生方は今、湖陵には一人もおられない。ということは卒業後、随分と月日がたつて

湖陵で学んだ三年間は僕らにとつて、いや自分自身にとつてもすごく充実した時期であつたと思う。極めて潤いのある、そして伸びのびとした学校生活を過したと思つている。ここに、静かに振り返つてみると、全校マラソン、行灯作り、湖陵祭等々全てが懐かしく、一つ一つが今でも強烈な印象として残つている。

また、学校の近くにある春探湖、千代の浦海岸なども僕らの自然学習の一つの場所でもあつた。

ところで、僕ら湖陵第十二期生は、昭和三十五年の春に卒業したということ、最初、三五会（さんごー会）という名の同期会を作りました。その後、湖陵十二期同期会と名を変え、毎年八月の第二土曜日を同期会の日として、幹事クラス（一回、三クラスづつ）の持ち回りにより、趣向を凝らして開催している。この時は、全国各地（？）から同期生が帰釧し、あちこちのグループに分れて旧交を温める場面に会おう。今後、卒業三十周年を記念する話もでており、その面では数ある同期会の中でもわりにまとまりのあるところを誇示できる同期会といえようか。

それにしても、僕らも齢四十の半ばを越えんとしています。それでも、まだまだ若さと行動力は往時を凌ぐものがあると自負している（？）連中が多いようである。でも、本音はこれです。「四十半ばにして惑う」

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

釧路パシフィックホテル

中村 隆(釧中27期)

釧路市栄町2丁目6番地 ☎24-8811

れんが屋★AM 11:00～PM 11:00

トロイカ★AM 8:00～PM 11:00

パシフィックイン・八まき・八宝園

青春譜・湖陵ヶ丘

(15)



釧中32期 奥田達也

阿寒紀行(後)

三日目(昭和五年七月二十七日)
朝七時に米内孝悦は学友を叩き起こした。蚊やアブに襲われての薪拾い。炊事は高見正見。その朝食のうまいこと「素敵素敵」と叫びながら食べる。女学生の一団に囲まれては、歓喜に包まれるのもむりはない。

「二時間特に学生ですから三十銭」という貸しポート屋に「よおし一つ俺の春探湖で鍛えあげた腕をお見せしようか」と勇む五人。「国立公園候補地大探険」の使命にもえて中の島まで進む。七月の強烈な太陽に皆が素裸になる。「おいマリモを見に行こう」と血の気の多い若者三人は、舟上会議も一決してヤイタイ島へ向かう。二時間かかって着いたがマリモは見えない。腹いせにバライチゴの赤いのをどんどん食べた。「さあ帰ろう」と舟を進ませるが風の強いこと。凪いでいた湖に高

波を見て三人は不吉な前兆を感じ懸命に漕ぐ。だが舟は進まない。横波をくらったら終わりだ。横波に神経を極度にとがらせて風の中を漕ぐ。「十七歳を一期に死ぬか」と生死の境を彷徨すること三

御来迎に歓喜する

強風に命がけ漕ぐ大探険

時間。ようやくにして安全地帯に入ることが出来た。

テントに寝ること病人のごとし。目覚めた六時、元気は回復。皆で炊事し、夕食を終え、キャンピングファイヤー。月は凄く冴える。十時四十二分にテントを出発。

登山口から雌阿寒岳へ、夜中の登山道は五人を元気にする。

原始林の風にゆれる枝音と溪流の音に寂しくなつて、いつしか黙々としてしまう。出世坂くらいの急坂をいくつも登る。恐怖と緊張

の夜間行軍はそれほど疲れない。山林巡視小屋に午前零時半つく。ストープが真赤にもえている。市内の一行ともあい、五人は寝込む。一時過ぎに再び登りはじめ。森林地帯を過ぎ道松地帯に入ると、空が見られ東の方がほんのり赤らみかけてくる。靴の音、草鞋のすれる音、杖のこつこつという音が、静寂を破って響きわたる。道は細い。前方に真黒な剣が峰が聳えたつ。清水谷を越える頃、空は明るくなり、星の瞬きは消え去る。八合目なので大きな眺めは

見られない。

鈴の音が聞こえ、小屋で一緒の一行が登ってきた。グループは一行に従って道松もない火山礫の道を一列になつて無言で進む。石室を左に見て小丘を登り、又くだる。盆地状の隅で噴煙が見えた。前方に円味がかつた山が雌阿寒の頂上なのだ。噴火口の中にあるので登っている感じはない。円い山も登るとなれば非常な傾斜で、出世坂の比ではなく、五歩登っては休

み、あるいは斜に登つたりして、

頂上へ近づくと、がらがら鈴を鳴らした一隊が蟻の這い上つてくるように見える。御来迎に間近いころ、やっと頂上に着いた。すでに五、六人いる。「おお大自然だ。見よ、のぼりくる朝日を見よ。大自然のパノラマを。登山の歓喜はここに存在するのだ」

神聖な朝日が雄阿寒岳を越えてのぼってくる。湖上は一面に眞つ白な雲で覆われ、遙か釧路も雲海の下。「いいなあ」とつぶやきながら黍団子とビスケットを頬張る。朝日を正面に受け、頂上で嵯峨進に写真を撮ってもらう四人。朝食を食べる鈴の一行など山上には三十人位集まつていた。

日が高くなつて下山する。噴火口の坂は、砂利の塊で、立っているだけで自然に砂すべりして下ることが出来る。阿寒富士。赤味がどんよりと薄気味悪い赤沼。力一杯に石を投げるが届く距離ではない。重い液体を流し込んだような青沼。黒く沸騰する沼の横では硫黄の噴気孔から眞白な煙が吹きあげている。岩高蘭は小豆粒ほどの眞黒な実を結んでいる。一時間で麓の登山口に着く。眠り、食べ、楽しい晚餐を終え、阿寒湖との離別を惜しみ寝入った。

釧路市幣舞町2番2号

株式会社 吉井写真館

代表取締役 吉井 祥 朔 (湖陵18期)

電話 41-4798番

御卒業・御入学の
晴れの日を
歴史の1ページに...

釧中一期生 記念写真みつかる

釧中一期生の卒業記念写真が、このほど同窓会の遠藤幹事長のもとに届けられた。これは、釧中一期生の工藤政之助氏が所蔵していたものであるが、氏の物故後、実妹の工藤スエさん（八〇才）が大切に保管にしていたのである。また昨年十月に、物の片付をしっていたところ偶然出てきたそうである。工藤さん宅は、現在三代目の建築工務店経営の老舗であるが、工藤家と親交のある磯部正巳氏（釧中七期）に話が伝わり、七十年振りに陽の目をみることにな



上段中央 熱田校長、最上段左より佐々木一雄、工藤政之助、津田敏市、秀尽、渡辺政治、奥村一郎、中村完一、広島留作、山内峻、3段目左より神子島卓雨、高橋孝一郎、田中信夫、鈴木洋一郎、古川康平、池田吉雄、小川久計、福島高一、吉井夔、八代武助、2段目左より石川幸次郎、山本平吉、須磨幸三、加藤祐三、岩中雄祐、尾崎実、本田毅夫、牧弘之、伊藤英夫、橋本健一、佐藤栄一、中川久平、最前段左より榎本書記、洪川正記、高橋健次郎、万沢晋、阿部与作、佐々木種彦、川添正雄、武藤郁、宇野茂太

つたのである。磯部氏は、この写真の一人ひとりの名前を確かめようと、横浜在住の佐々木一雄氏（在京釧中会々長、第十四号に紹介している）にこの写真を送って、名前を記して返送してもらったのである。写真の裏面には、力強い筆教で大正七年三月撮影、北海道廳立釧路中学校第一回卒業記念と

PTA・同窓会・後援会 合同懇話会



去る二月七日、東急インを会場にして、PTA、同窓会、後援会の各役員と母校の先生方との合同懇話会が開催された。最初に町田校長があいさつの中で、会の目的について、母校を支える各組織の会長からの要請で、学校の現況を知り、卒直な意見、要望を出して一層湖陵に対する理解と協力を深めていきたいと話された。松原PTA会長が司会役になって、学校長から母校の運営と校舎の移転問題についての説明があったあと、学校の現況について、教頭、各学年主任をはじめ各部の主任からくわしい説明がされた。参加者の各氏から、質疑や意見が出され、話題が深められた。入学したときには優秀な生徒が、卒業のときにはあまり伸びないとい

書かれており、長い時間と空間を越えて実に重厚で威厳のあるすばらしいものである。初めは、母校の湖陵文庫に寄贈して大切に保管しようと考えていたが、折角の貴重な写真なので、やがて建設されるであろう同窓会館の中に納めるのが良いというわけで、今事務局であずかっているところである。

電算写植機設置により、より早く、より美しく



釧路綜合印刷株式会社

085 釧路市白金町19-2 TEL 23-9201(代)
FAX 23-9205

湖陵同窓会総会開く 600名参集

湖陵四期、アイデアの校章入り手拭で 校歌、応援歌を盛り上げる



ページー杯の
釧中卒学生 卒業へ
後輩から栄事贈呈

昭和六十一年八月十日晴天のもと昭和六十一年度同窓会総会が約六百名参加のもと例年通り商工会館で盛大に開催された。この時いつも思うことであるが大会当日までこぎつけるとほぼ七〇%セントは終了したと云えるかも知れない。すでに当番幹事を一度経験された方はご理解頂けると思うが四月初旬を皮切りに総会前日まで幾度も会議を開き面密な計画を樹てまたその都度修正を行い来る総会当日に向けて最後まで調整を行い最終計画を樹立するのである。そのようなことから労苦を共にした仲間がこのまま音信普通になつてはさびしすぎる一年に一度位はまた皆なの元気な顔をみせ合うではないかということになり同期会結成の運びとなるのがずいぶん多いようである。今日の当番期は四、十四、二十四期の面々であるが、奇しくも現在同窓会幹事長として活躍中の遠藤隆吉氏は四期でありこのため

すべての打合せ会議に熱が入るの
は納得の行くところである。総会
は沢田副幹事長の司会で進められ
た。長内同窓会長のあいさつがあ
り来賓として町田校長、わにぶち
釧路市長があいさつに立ち、それ
ぞれの立場で現校舎改築問題にふ
れられたが手前びいきの受け取り
方をすればごく近いうちに新しい
校舎が出来上がるかもしれないと
云う印象を感じ取ったものであ
る。さて議事に入り昨年同様議長
に中村隆氏を選任した。中村議長
云く、なんで私が議長に選ばれる
のか解らないがと前置きして議事
を進めるのであるが素早く簡潔に
議事を総了させ独特の笑顔を見せ
られるのであるがさすが名議長と
思うのである。遠藤幹事長の事業
報告並びに決算報告もすべてス
ムーズに終了しこん親会へと進行
した。こん親会は終始実になごやか
なうちに終了した。プロのバンド
や歌手にまじり参来した同窓会仲
間も余興に加わり会場は楽しいふ
んいきで包まれ時のたつのも忘れ
ていたものである。参会したメン
バー誰もがもう少しと思つてい
るうちに時間の都合上終宴の止むな
きに到つたものである。それにし
ても今回のこん親会の最大のヒッ
トは四期の皆さんが自前で釧中卒
業生の皆様に釧中湖陵の校章入り

の手拭を送ったことであろう。さ
らにその手拭をハチマキにして釧
中諸先輩全員が登壇し、声もかれ
よとばかりに校歌を熱唱し応援歌
によいしれていたことであろう。
参加者の誰もが惜みない拍手を送
つていた実に素晴らしい美しい光景
である。先輩諸候には後輩からの
この暖かい心のこもった送りを物
いつまでも大切な思い出として今
後の人生をいつまでもいつまでも
長生をしこれからも毎年開催され
るであろうこの同窓会にご参加願
いたい。先輩がご出席され後輩の
行末を見守りときにはアドバイス
をして頂き伝統ある釧中湖陵の名
を今後より一層高めたいものだ
いまさらながら思いを厚くしてい
るものである。もう間もなく五期
を中心とした当番(関口)期の面
々がアイデアを結集し六十二年
八月に開催されるであろう同窓会
に全力を傾注されることであらう。



母校の繁栄をねがって
全員の万才三唱

真心伝えたい…御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

釧路シーサイドホテル

黒滝恵一(湖陵14期)

〒085 釧路市南大通り5丁目1-1
ご予約・お問い合わせは (0154) 41-1717

湖陵文庫

「在京釧中会誌」(12)より

今回は、湖陵文庫から「在京釧中会誌」の中で掲載されている釧中一期生の佐々木一雄氏の随筆を紹介する。この誇るべき釧中の大先輩は、釧中から米沢高工を経て農商務省に入り研究に専念、工学博士となり、山形大学教授に迎えられ定年退官後、神奈川大学教授となつて横浜に移られた。後、勲二等旭日中授章の米嘗に輝かれた。

一昨年は米寿の賀を迎えられ、現在、益々お元気で活躍されている。佐々木氏の文は、実に格調高く鋭さとやさしさの調和のとれたすばらしいものである。紙幅の関係で小品の掲載になつたのであるが――

シンビジウム

今年の正月用鉢花として、洋ランの一種であるシンビジウムが始めてわが家に登場した。三男が知人より戴いたものである。

このものは前年の暮れから、薄い小豆色の径六厘程のラン科特有の形状の花を、高さ五〇厘内外の花茎五本に合計数十輪、總状花序に咲かせ、誠に豪華であり、目を十分に楽しませ堪能させるものであった。

由来シンビジウムには六十種以

上の種類が知られている。わが家の珍客となつたものは「ストラスエイボン・レッドナイト」という名札が付けられていた。恐らく数多い名花の中の一つであろう。

このものは花の寿命が長く、華麗であり、又高蒲に類似して叢生し、その長さ六五厘程に及べる長剣状の葉は直立又はゆるい弧を画いて半ば垂れ下っている。花の美しさと葉の緑の爽やかさが誠に対照的であり、一段と引立て合うものである。

花は特別の施設で面倒を見る様な事をせずに一月中殆んど始めの頃の花容を保つのであったが、この事はシンビジウムが正月用鉢花として、一級品たる實様を示すものと思われるのであった。

因みにシンビジウムの花は、勿論造花でない生花である以上、何れは花容の衰頹する事であろうと懸念もされるのであった。そしてその危惧の念が現実となつたのは二月十七日であり、私は早速該当する一本の花茎を切り去つた。次で二月二十四日に更に該当する二本目の花茎を切り取つた。但しこの時点に於いても、残つた三本

の花茎に咲き誇る花の数は容易に数え難い程に十分に多く、左程寂寥感を与えないタフさが感じられるのであった。

シンビジウムは誠に花も葉も風格を具えている。不図気付いたのであるが、若し仮りに花が全部姿

同窓会主催

第七回教育講演会

十月二十八日午後、体育館で一年生を対象に長内会長に講演をしていただいた。

前半は、先生の湖陵在学が戦時中であり、多くの苦勞があつたこと、そして、釧中一期生の中川久平先生の梅楓塾のことにもさかのぼり、今も脈々と流れる釧中魂について触れていただいた。

後半は、先生自身の外科医としての経験から、特にその職業観を強調された。

「将来の進路・職業については自分自身を打ち込めるものを選び、職業は毎日やることだ。たしかに生活の手段ではあるが、職業とは自分の個性・人格を社会に知ってもらい社会に役立つこと、すなわ

を消し去つたとしても、ゴムや観音竹、或はポトスの様に越冬用観葉植物としても結構通用する気品ある鉢物たり得るだろうと思つたのである。

そして何れの角度より眺めても、免も角、流石に多くの人々が高根の花なりと見做していることが、正に当然なりと肯かれもした。

私は以上の様な見解に到達した心を嬉しく思うのであった。

「職業とは人格(個性)の表現」である。それが自分自身に課せられた責任だ。そのためには普段の努力が必要だ。

二十一世紀の世界の文明になうのは君たち高校生である。高校生は人生の第一歩を踏み出したところだ。自分の目標を高くもち、頑張つてほしい。」

風が強く寒い日であつたが、生徒は熱心に耳をかたむけ、ちょうど、自分の将来の生き方を考えさせる時期であつたこともあり、この講演は、一人一人の心の中に十分しみこんだ内容であつた。

(文責 湖陵高校教諭

伊藤 紘)

御卒業・御入学の喜びを1枚の写真に……

湖陵・江南・北陽・星園・短大高校他
市内小中学校卒業アルバム専属作成

株式会社 工藤写真館

釧路市南大通5-3-7 TEL 41-5751

工藤寿男(釧中26期)
駐車場(20台収容)完備

母校同窓会と共に歩む 釧路教職員湖陵会

釧路教職員湖陵会は、創立以来三十余年を経過し、現会長を中心に合員一同、増々発展すべく努力を重ねているところです。

釧中、湖陵高校の出身者で、釧路一円に在職する教職員が大同団結をはかり、母校を後援し、全員相互の親睦と修養を目的としております。釧路教職員湖陵会も、昭和六十一年度より、研修する湖陵会へと進展させるべく、上岡信明会長（現、朝陽小学校長）以下、三百余名が一つとなって、会員相互の資質向上を旨としておとろです。

初年度としての取組みは、親窓会より現役員の方々に講師としてお招きし、前後二回、「教職員



湖陵会に望むこと」を柱に教育講演会を開催いたしました。

第一回目は七月の学期末の忙しい時期でしたが、久本甫副会長から、母校の移転に関わる期成会の動きと経過、完成予定の青写真についてお話をいただき、隆昌一途の母校に思い致すことが出来ました。母校は明治四十五年（大正元年）

事務局だより

に北海道序立釧路中学校として認可され、翌、大正二年に開校されたから今日までに築き上げてきた輝かしき伝統を讃え、近々、緑ヶ岡に聳え立つ新校舎を一日も早く期待したいというお話と、全市で活躍されている教職員の方々に對する期待を申し述べられました。

第二回目は二月、長内宏会長と遠藤隆吉幹事長においてをいただきました。

長内会長よりは、私共教職に携わる者として忘れてはならない貴重なお言葉をいただきました。日本の将来を信じ、二十一世紀

に生きる子どもたちの育成に全力を尽くしてほしい。そのためには知識偏重を避け、人間性豊かさを育成する教育を期待するということでした。

私共参加者一同は会長の講演に、教師としての使命を忘れることなく、今後とも精進しなければと痛感した次第です。人間の絆を深めるこの湖陵会もまた大切にしていかなければならないと決意を新たにしているところです。

また、教職員湖陵会が細やかながらも、会創立以来毎年母校同窓会に對して会費の半額（現在十八

万円）の助成を欠かさず行っていることに對し、丁寧な謝辞をいただき、恐縮しているところであります。

遠藤幹事長よりは、母校同窓会の近況報告を兼ね、会報「くまざき」の幻の創刊号にまつわるエピソードと共に、同窓会々館の建設について近況報告や、その御苦労と今後の見通しなどについて詳しくお話をいただきました。

私共教職員湖陵会は、会員相互更に精進し御期待に応えたいと考えているところです。

（文責 幹事長 吉井正）

厳しい寒さが多少やわらいで来た今日此の頃ですが会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。これから彼岸荒れと証して釧路独特のどかさに見舞われるのかと考えると何んともやるせない気持ちになります。さて、昭和六十一年度同窓会総会も無事終了されました。四月に第一回目の会合を持たれてからほんとうに長い間に亘り何度も会議を開かれた当書幹事の皆様大変ご苦労様でした。早いものでもう一ヶ月と少々で昭和六十二年度総会の打合せ会議に入らなければならぬ訳ですが五、十五、二十五期の皆様方のごふんとうを、に期待しておりますのでよろしくお願

申し上げます。なお昭和六十一年八月十日総会終了後の主な事業内容をお知らせ致したいと思えます。

- ▼八月十六日「江南同窓会総会開催」長内会長、遠藤幹事長出席。
- ▼十月十四日「湖陵文庫」創設趣意書発表。
- ▼十月二十八日「湖陵同窓会主催講演会開催」長内会長が「湖陵ヶ丘に学びし頃」と題して講演する。
- ▼昭和六十二年一月十三日「湖陵高校校舎改築陳情」のため長内会長がPTA後援会の会長さん並びに関係者の皆さんと出札する。
- ▼一月「湖陵文庫」へ書架の寄贈
- ▼二月七日PTA、後援会、同窓会、学校の合同こん話会が開催され、

長内会長始め多くの役員の方々が出席されました。

- ▼二月十四日「教職員湖陵会研修会開催」同窓会からは長内会長始め副会長幹事長が出席致しました。
- ▼二月二十日「くまざき」発行編集会議開催」長内会長、幹事長、副幹事長が出席。

以上主な事業内容について記載致しましたがいま同窓会として会員名簿を作成すべく準備中でございます。また先の話になりますが名簿完成の折には一人でも多く会員の方がお買上げできるようお願い申し上げます。最後になりましたが会様の益々のご発展とご健康をお祈り申し上げます。

流水が岸を離れて、きびしかつた冬がようやく去つて、四三三六名の卒業生が巣立とうとしている。わが同窓の仲間は一万余三百余になるそうである。卒業生諸君の前進に栄光を祈る。

- ▼同窓生の絆を強めるには、より正確な名簿づくりによると云われる。昭和五十二年に作成されたが十年を経過した今、同窓生の消息を盛った名簿づくりを新年度の事業にしようとする事務局では準備中である。乞うご期待。

編集にたずさわった人
上岡 信明 和田 信幸
遠藤 隆吉 吉井 正
関口 政司 豊島 弘道